

黒豹注意報 7

～そして、純情OLタンポポは…～

もくじ

黒豹注意報 7 5

番外編
笑顔と愛を花束に込めて 257

黑豹注意報 7

前巻のあらすじ

夏の気配を感じ始めた七月。

私、小向日葵ユウカは、彼氏である竹若和馬さんのマンションで一人、休日を過ごしていた。

リビングでノートを広げ、ボールペンを握る。これは彼と出逢ってからの日々を綴っている日記帳である。和馬さんに見られるのは恥ずかしいので、彼が休日出勤している今日は、日記を書く絶好のチャンスだ。

私が勤めている文具メーカーは、新年度から数ヶ月経った今は、全社的に仕事が落ち着いている。それなのに、なぜ同じ会社で働く彼が出社しているかというと――

先月、和馬さんは一時記憶喪失になり、しばらく休んでいたことで仕事が溜まっているから。とはいえ、彼の上司である社長は、まだ無理をするなど言っている。

今では記憶や体調に問題はないけれど、和馬さんは、入院したことで迷惑をかけてしまったと気にしているらしく、これまで以上に仕事に精を出しているのだ。

和馬さんが記憶喪失になったのは、社長を庇って負傷したことがきっかけだった。社長はそのことを申し訳なく思い、殊更気遣っているようだけど、和馬さんしてみたら体を張って社長を警護

することも仕事だし、そのことでわだかまりを抱いている様子はない。

和馬さんの口からそういった話を何度もしているようなのだが、社長の心配性は今なお続いている。数日前に私が社内報の件で社長室を訪れた際も、バリバリ働く様子を渋い顔で眺めている社長を見かけた。

穏やかな表情で静かに仕事を進める和馬さんの様子に、おかしなところはなかった。特に無理をしている素振りも見受けられない。

だけど、周りの人は、やはり気が気ではないのだ。過労やストレスによって、脳に悪影響を与える可能性もあるのだから。

ここで私は、和馬さんが入院した病室を訪れた時のことを思い返す。

『ところで、こちらの女性はどこなですか？』

和馬さんは、ここ三年の出来事を覚えていなかった。つまり私と出逢ってからの記憶を、すっかり失っていて……

『私と親密になる機会を窺っているのであれば、それは無駄です。どうぞ、お引き取りください』病室を訪れた私を、自分に取り入ろうとする迷惑な女性と認識したのだ。その態度は、まったく取り付く島もなし。彼は全身で私を拒絶していた。

その衝撃は大きく、はじめの数日間は、悲嘆と絶望に満ちていた。

和馬さんに忘れられたことがつらくて、拒絶されたことが悲しくて、思い出してもらえないことが寂しくて。いったい、何度泣いたことだろうか。

もう二度とあんなことは起きてほしくないけれど、あの出来事があつたからこそ気付いたことがたくさんある。それで私の心も固まり、和馬さんとの結婚に向けて大きく踏み出せたのだから、悪いことはかりではなかったのかもしれない。

……って思わないと、苦しくなるからね。あの時のことを思い出だけで、いまだにジンワリ涙が浮かぶ。

とはいえ、私一人では絶対に乗り越えられなかったとも思う。

和馬さんのお母さんの優しい言葉や、社長の励まし、中村留美先輩の言葉にも力をもらった。

『あの独占欲大魔王が、そう簡単にタンポポちゃんのことをなかつたものにするはずがないわ』和馬さんと長年の付き合いがある留美先輩にそう言われると、わずかながら前向きになれた。

少しずつでもいいから、焦らずに。こういう時こそ彼を支えてあげるべきなのだと思ひに言い聞かせて。

……それから、おじいちゃんの形見のカメラも後押ししてくれた。

宝物であるカメラは、一度は私の手を離れてしまったけれど、和馬さんが危険を顧みず、取り戻してくれたものだ。そのことを思い出した時、私は彼の大きな優しさと深い愛情に、改めて気付いた。

そして私は、理解した。『好きという感情の先にあるものが、無条件で相手に寄り添いたいという思いだ』ということ。

そのことに気付かせてくれたのは、他でもなく、過去の和馬さん。それはまるで、時間差で仕掛

けられた愛情の爆弾だった。

そうして、和馬さんは奇跡的に記憶を取り戻して——私は彼に逆プロポーズした。

『私を和馬さんの妻にしますか？ それとも、和馬さんが私の夫になってくれますか？』

『妻になる人』の欄がすでに記入されている婚姻届を目にした時の彼は、これまでに見たことがないほど驚いていて、私のサプライズは大成功！

いよいよ結婚に向けて本格的に動き出したのだった。

「サプライズが成功したのはよかったけど、あのあと思い切り抱き締められてキスされて、大変な目に遭ったんだよね……」

ポツリと呟いた私は、ボールペンのお尻でカリカリと頭を掻く。そこに、「なにをしているのですか？」と声がかかった。

「ひゃっ!? か、和馬さん、帰っていたんですか!？」

集中するあまり、休日出勤していた彼が帰ってきていたことに気付かなかつた。

「つい先ほど。部屋がずいぶん静かなので、ユウカが寝ているかと思い、ソツと入ってきたんですよ。一応、何度か声をかけましたがね」

彼は目を細め、優しい微笑みを向けてくる。

「そ、そうでしたか。ちよつと夢中になっていて、まったく気付きませんでした。はは、はははっ」苦笑しながら、慌ててノートを閉じた。

思うままに書いているので、人様に見せられるようなものではない。彼に気づかれないよう、ローテーブルの下にノートを隠す。

そんな私の態度を気にした風もなく、和馬さんはにっこり笑った。

「お土産です。あなたが大好きなプリンですよ」

差し出された箱には、有名店のロゴがプリントされている。私はすぐさま、その箱に飛びついた。「ありがとうございます！」

満面の笑みを浮かべて箱を受け取る私の横を、和馬さんが素早く移動する。そして、私が隠したノートを手に取った。

パラパラとページをめくる彼に気が付き、私は慌てふためく。

「あーっ！ 返してください！」

プリンが入っている箱をテーブルに載せ、すぐさまノート奪還へと向かう。

しかし、異常なほど反射神経がいい彼からノートを奪い返せるはずもない。頑張って手を伸ばしても、和馬さんはヒョイヒョイと避けてしまう。

「和馬さん、返してくださいよ！」

そう声を上げるも、彼はノートを持つ右手を高々と上げた。

——ずるい、これじゃ、届かないではないか。

それでもめげずに手を伸ばしてジャンプしていると、和馬さんがニコツと笑う。

「ノートを返してほしかったら、私に『おかえりなさいのキス』をしてください」

「はあっ!? なに言ってるんですか！」

「おや、返してほしくないのですか? では、全部読んでしまいますよ?」

「やめてー! 読まないでー!!」

相変わらずドタバタしていますが、今日も私たちは仲良し(?)です。

第一章 未来へのスタートライン

1 どんな私でも

仕事に恋愛にと全力投球していたら、あつという間に時間が過ぎていった気がする。来月の八月八日の誕生日で、私は二十二歳だ。

「去年、和馬さんにネックレスをもらってから、もう一年経つのかあ」

アパートの階段を降りながら、私はしみじみ呟いた。

同じ部署の社員たちだけで誕生日を祝ってもらうことになっていたのに、和馬さんが花束持参で乱入してきたのも、今となつてはいい思い出だ。

首元で揺れるネックレスに触れながらふと周りを見回すと、夏らしい様相を呈している。

公園や各家庭の庭先でも向日葵が元気に育ち、目にも鮮やかな黄色い花を太陽に向けていた。

日差しや気温の変化を感じたり、向日葵などの夏の花を見たりすると、『ああ、夏が来たんだなあ』と思う。

私は大輪の向日葵をしばらく眺めてから、いつものように会社へと向かっていった。

「おはようございます！」

週明けの月曜日、私は咲き誇る向日葵に負けなくらい元気よく挨拶をして総務部に足を踏み入れる。こうやって大きな声を出すことで、『今日も頑張るぞ！』と自分に気合いを入れる意味もあった。

総務部広報課に配属されて一年と三ヶ月が経ち、任される仕事の量も責任も増えた。可愛い後輩たちもできて、彼らの前では頼り甲斐のある先輩でいたいと思っている。

『さすが、小向日葵先輩ですね！ 頼りになります！』

『私、先輩に一生ついていきます！』

『先輩を見習って、俺も立派な社会人になってみせます！』
なんてね。……残念ながら、いまだに言われたことはないんだけどさ。

そんなことを考えながらデスクに向かうと、先に出勤していた人たちが口々に挨拶を返してくれた。

「おはよう、タンポポちゃん。相変わらず、元気ね」

「夏バテ知らずで、本当にうらやましいわ」

「やっぱり、若さかしら」

私を見た先輩たちが、微笑みを浮かべている。

こうした平穏な日常のありがたみを、最近はつくづく感じていた。

自分の席に着くと、私は荷物を置き、社長室に向かう。今日は社内報の件で打ち合わせをするこ

とになっているのだ。

「和馬さん、今日も朝から山ほど仕事をしているんだろなあ」

社長室の前に着いた私は、ノックする前に小さく咳く。

その時、ここ最近ですっかり聞き慣れたセリフが室内から聞こえてきた。

「おい、竹若。その仕事は急ぎじゃないから、明日に回して構わないんだぞ」

そんな社長に、和馬さんがすかさず言葉を返す。

「ですが、こちらの書類を片付けてしまわないことには、どうも落ち着きませんので」

淡々と言い返すセリフも、同じように聞き慣れてしまったものだ。

「それなら、他の秘書たちに手伝ってもらえ」

「いえ、彼らには別件で緊急の仕事を頼んでおります」

「戻ってきたら、手伝わせばいいだろうが」

「それほど難しい案件ではありませんから、私が今やれば彼らが戻ってくる前には片付きます」

「ああ、もう！ 病み上がりでバリバリ仕事をこなす部下は、どうやって止めたらいんだよ！ 仕事をしないって言うなら、いくらでも怒鳴りようがあるのに！」

——んー、今日も心配されるほど仕事をしているのかあ。

でも、和馬さんの声には張りがあり、体調を崩している様子はない。

そのことにホッと胸を撫で下ろしながら、社長室の扉をノックした。

「広報課、小向日葵です」

「ああ、入ってくれ」

社長の返事と共に、扉が静かに開いた。

開けてくれた和馬さんに、ニコッと微笑みかける。

「お疲れ様です」

言葉をかけながら、念のため、注意深く彼の様子を窺う。顔色は悪くないし、足元もふらついていないから、とりあえず大丈夫だろう。

「ユウカもお疲れ様です。社内報の件で、打ち合わせでしたよね。どうぞ、中へ」

「はい、失礼します」

ペコリと頭を下げ、中に入る。

自分の席に座って書類をめくっている社長にも、頭を下げた。

「小向日葵君、五分ほど待ってくださいか」

「かしこまりました」

私は促されて応接用のソファへ腰を下ろしたのだが、その時、和馬さんの机にある花瓶が目に入った。

それは、以前に私とお揃いで買ったものだ。

私の花瓶は、あの日、和馬さんの怪我を知らせるかのように大きくヒビが入ってしまったから、もう生花を入れるわけにはいかない。けれど今、和馬さんがしているみたいにドライフラワーを入れる分にはまだ使えそうだった。

——捨てちゃうのは、まだもったいないよねえ。

そんなことを考えていたら、和馬さんが静かに声をかけてきた。

「どうしました？」

アイスカフェオレが注がれたグラスを私に差し出しながら、和馬さんが軽く首を傾げる。

私の花瓶にヒビが入ってしまったことをすっかり伝え忘れていたので、そのことについて彼に話す。

それを聞いた和馬さんは、困ったような笑みを浮かべた。

「そうでしたか。捨ててしまうには、やはりもったいないですね」

私はコクンと頷き返す。

ただの花瓶ではなく、彼とお揃いだからこそ、簡単に捨てたくない。それは、和馬さんも同じ気持ちのようだ。

しばらく花瓶を見つめていた和馬さんは、おもむろに口を開く。

「ですが、いずれヒビが大きくなって、割れてしまうかもしれません。その時に、破片で怪我をしないとも限りませんよ」

「あつ、そうですね」

確かに、彼の言う通りだ。私が怪我をするのは自業自得だけど、万が一、私以外の人に怪我をさせてしまつてからでは遅い。ガラスの破片で切った傷は、案外深くなるものだ。

「分かりました、あの花瓶は片付けます」

私の言葉に、和馬さんが優しい笑顔と共に頷き返してくれた。

「きちんと感謝をして、花瓶を処分しましょうね」

「はい、そうします」

そう決めたところで、次の問題が浮かび上がってくる。

「和馬さんが使っているものは、問題ないですよ。これと同じ花瓶が、まだ売っているといいんですけど」

この花瓶は、留美先輩の友達が経営しているセレクトショップで買ったものだ。

私たちが行った時には十個ほどあったけれど、今も在庫があるかどうかは分からない。

——せっかくだから、和馬さんとお揃いの花瓶がまたほしいんだけどなあ。

そんな私の胸の内に気付いた彼が、腕を伸ばして私の頭にポンと優しく手をのせた。

「こちらは、部屋に持ち帰ります。売り切れだった時は、これとは違うデザインでお揃いの花瓶を買いましょう」

デスク上の花瓶から和馬さんに視線を戻すと、柔らかい笑みが向けられる。

「私たちは違う部署で働いていますので、社内でも顔を合わせる機会は限られています。ですから、せめて同じアイテムを持つことで、あなたに会えない寂しさを和らげたいのですよ」

私の気持ちを見透かしたような言葉に、なんだか照れくさくなってしまった。だけども同じように考えてくれていたことが嬉しいから、私も笑顔を返した。

「はい、そうですね」

お互いに微笑みを交わしていたら、やたらと大きな咳払いが聞こえてきた。
「うおっほん！」

それを聞いて、私はハッと我に返る。慌てて和馬さんから距離を取り、背筋をピシッと伸ばした。
——いけない。和馬さんの笑顔に見惚れて、一瞬、ここが社長室であることを忘れちゃったよ。

「す、すみません、社長！」

ペコペコと頭を下げる私の横で、和馬さんは余裕顔だ。

「社長の仕事が片付くまで場繋ぎをして差し上げましたのに、相変わらず、無粋な方ですね。部下の恋愛を邪魔しますと、馬ではなく、この私に蹴られますよ。よろしいですか？」

不機嫌も露わに目を細める彼に対し、社長はフンと鼻を鳴らした。

「職場で、しかも上司の前で、堂々といちゃつくお前が悪いんだろ。それに、小向日葵君は俺に用事があつて来たんだ」

手招きしながら呼び寄せる社長に向けて、私は急いで立ち上がり足を踏み出す。

そんな私に、うしろから伸びてきた腕が絡み付いた。

「きゃっ」

驚いた私は踏ん張ることができず、引かれるままに体を大きく反らしてしまう。

背中に広い胸が当たったと同時に、すっぽりと包み込まれてしまった。

「か、か、和馬さん!？」

目を白黒させる私に対し、彼はいつものように飄々とした表情を社長に向けていた。

「愛してやまない恋人を前にしたら、甘い言葉の一つも出てくるものです。…ああ、寂しい片想いを続けている社長には、私の気持ちを理解するのは難しかったですね。またしても、失礼いたしました」

さすがにこれには社長も腹を立てたようで、拳で勢いよくデスクを叩いた。

「たーけーわーかー！ー！」

ドンという鈍い音に重なり、低く大きな声が室内に響き渡る。今日も今日とて、賑やかな社長室だ。

怒鳴る社長と、静かに言い返す和馬さん。騒がしい光景だけど、ある意味ホッとする。彼が記憶喪失になる前と、まったく変わらない光景。

それもこれも、心が広い社長のおかげだろう。

——そうだ。私も社長にはお世話になっているし、一輪挿しを二つ贈ろう。そのうちの一つを社長も片想い相手にプレゼントしたら、会話のネタになるかもしれないね。

二人の様子を苦笑しながら眺めていた私は、そんなことを考えていたのだった。

その後、社長を必死に宥め、この部屋に来た目的をどうにか果たした。

それから総務部に戻って一日の仕事をきちんと終え、終業後の今、和馬さんの部屋を訪れている。彼と一緒に帰ってきたのだ。

リビングに向かった私は、ローテーブルの上に和馬さんが会社で使っていた花瓶を置く。

挿していたミニひまわりのドライフラワーも一緒に持ち帰ってきた。

私は床に座り込み、ミニひまわりを指で突つつく。

彼が退院してから随分時間が経っているけれど、花の状態はかなりいい。生花ほど手入れが大変ではないものの、ホコリや湿気に注意は必要だ。

——和馬さん、大事にしてくれているんだな。

入院中も、職場に復帰した後も、彼のそばにあるミニひまわり。これから先は、この部屋で和馬さんのことを見守ってほしい。

彼はなにかと無茶をする人で、しかも大変だということを顔にも言葉にも出さないから、鈍い私には察するのが難しかった。

忙しくて大変な毎日を送る彼にとって、ほんの少しでもミニひまわりが安らぎになってほしいと願う。

——今、振り返ってみても、和馬さんの入院中は、本当に色々なことがあったよね。

ミニひまわりを眺めながら思い出していると、スーツの上着を脱いだ和馬さんが私の横にストンと腰を下ろす。

「そんな難しい顔をして、なにを考えているんですか？」

「和馬さんが入院していた時のことを思い出していました。もう結構経っているのに、つい昨日のことのようで」

私はもう一度ミニひまわりを指で突つつき、フツと口角を上げた。

すると、心なしか和馬さんの声の調子が暗くなる。

「それだけ、ユウカの心の中に残っているということでしょう。あの時は、本当に心配をかけましたね。すみませんでした」

私は顔を上げ、複雑な表情を浮かべている和馬さんを見つめた。

「すっかり元気になったじゃないですか、謝ってもらうことじゃないですよ。それに和馬さんが記憶喪失になったことで、私は本当の意味で自分の気持ちと向き合えたから、悪いことばかりじゃなかったと思っています」

「そうですか？」

不安そうに私を見る彼に手を伸ばし、艶々の黒髪をソツと撫でる。今では跡もすっかり消えただれど、怪我をした辺りを優しく数回撫でた。

「はい。ただ、和馬さんが怪我をしたことは、最悪でしたけどね」

微笑みかけると、長い腕が静かに伸びてきた。

絡めとるような、閉じ込めるような、そんな抱擁だ。力はそんなに強くないけれど、私の体を包み込む腕には確かな意思を感じる。

和馬さんがまとうシトラス系のコロン、逞しい腕の感触、布越しに伝わる体温、それらを感じることで、私の居場所がここのだと実感する。

——この腕の中に戻ってこられて、本当によかったなあ。

私は安心して彼の胸に体を預けたのだった。

翌日以降もみっちり仕事をして、迎えた土曜日。私たちは例のごとく、デートをしている。今日の目的は、お揃いの一輪挿しを買うことだ。

和馬さんが運転する車が、セレクトショップの駐車場に入る。停車後、私は急いでシートベルトを外し、助手席を飛び出した。

「和馬さん、早く、早く!」

途中で振り返り、優雅な仕草で運転席から出てくる彼を手招きして呼ぶ。

「そんなに慌てるよ、転びますよ」

クスクスと笑いながら歩いてきた彼が、スッと私の右手を握り締めた。

「だって、こうしている間に売れてしまうかもしれないから」

ゆったりと構えている和馬さんを引つ張るようにして、私はどんどん足を進める。

そんな私の様子に、彼はさらに笑みを深くした。

「ですが、駐車場には他の車はありませんし、お客は私たちだけではないでしょうか。それに、たった今、開店時間になったばかりではありませんか」

「いいえ、徒歩で来るお客さんだっているはずですよ」

そう言い返したところで、女性三人が店内へと入っていく姿を目にする。

「あっ! ほら、先を越されました! 和馬さん、行きましよう!」

グツと強く彼の手を引き、私は小走りで進んだ。

店に入った私は、当然のことながら花瓶売り場へと向かった。

「あれえ、ないなあ」

お目当ての花瓶はいくら探しても見つからないので、店員さんを呼んで在庫を確認してもらおう。

私は花瓶の画像をスマートフォンに表示させ、それを店員さんに見せた。

「この一輪挿しを買いに来たんですよ」

すると、店員さんは申し訳なさそうな表情をする。

「そちらの商品は、すべて売り切れになっておりまして……」

できたら買いたかったけれど、やはり、いい物は売れてしまうのだ。予想していたもの、ちよつと残念である。

とはいえ、留美先輩おすすめのこのお店は、他にも素敵なものがたくさん売っている。

店員さんにお礼を言いつて、気を取り直した私は別の花瓶を探し始めた。

じっくりと眺めているうちに、見覚えのあるイラストが描かれている花瓶を目にする。白地の陶器に、タンポポと黒豹がそれぞれ描かれていたのだ。

「和馬さん、これ!」

手に持った花瓶を見せると、彼はフワリと微笑んだ。

「ああ、私たちが持っているマグカップと同じイラストですね」

「うわあ、これにしようつと!」

別々のイラストなので、他の人からしたら対^{たい}になっているとは気付かないだろう。だけどタンポポというあだ名の私と、黒豹みたいな和馬さんなので、私たちからすると二つで一つ。私は即座に購入を決めた。

「素敵な一輪挿しが見つかって、よかったですね」

和馬さんの言葉に、私も笑顔になる。

「はい、前回の花瓶と同じくらい気に入りました」

「では、会計を済ませましょうか」

レジに向けて私の背中をソツと押す和馬さんに顔を向けた。

「ちょっと待ってください、社長にも買っていきたいんです」

それを聞いた和馬さんの片眉が、ヒョイと上がる。

「社長にですか？」

怪訝^{けげん}な表情を浮かべる彼に、私はクルリと半回転して向き直った。

「はい、色々お世話になってますから」

社長が社内報に協力的なので、とても仕事がやりやすくて助かっている。

時々^て手土産^{みやげ}のお菓子をおすそ分けしてもらっていることも、お礼をしたいという大きな要因であった。

何度も感謝の言葉を口にしてきたけれど、形があるものでお返しをしたことはなかった。ことあるごとに、社長が『礼は気にするな』と言うからだ。

それならいつそのこと、社長が片想いをしているという女性に写真を撮らせてもらい、それをプレゼントしようかと考えたこともある。カメラの腕はそこそこ自信があるし、社長も絶対に喜んでくれるだろう。

まあ、実現には至らなかったけどね。

もし実行するとしたら第一関門として、その女性の名前を聞き出す必要があった。社長がすぐに教えてくれるとも限らないし……難しい計画だったのかもしれない。

「なにもいらないと言われていますけど、やっぱり一度くらいは社長にお返ししたくて」

しかし、私の説明を聞いても、彼の眉は元の位置に戻らなかった。それどころか、ますます腑^ふに落ちないという感じが険^{げん}しくなっていく。

「ユウカが社長を気遣う必要はないのですよ。社員の仕事が円滑^{えんかつ}に進むよう、上司が働きかけることは当然の務めです。それに、手土産^{てみやげ}のおすそ分けは、社長のほうがあなたに助けてもらっているのですからね。おかげで、いただいた食べ物が無駄にしないで済んでいますよ」

そうかもしれないが、もらえばなしなのは、どうしても居心地が悪い。

どうしたら和馬さんを説得できるものかと、少し考え込む。

手にしている二つの一輪挿しに視線を落とした時、妙案^{みょうあん}が舞い降りた。

「あ、あの……、プレゼントしたいのは社長の片想いが実るようになって願掛けの意味もあるんですよ。ええと、その、私たちはすごく仲が良いから、それにあやかしてもらおうかなって」

それを聞いた和馬さんの眉が、ようやく元通りになる。

「なるほど、ユウカは優しいですね。……私たちの仲の良さにあやかるところで、あの方の片想いが実るとは思いませんが。まあ、いいでしょう」

この時、社長が大きなくしゃみを連発しているとは、思いもしない私である。和馬さんの了承を得られたので、社長用にピンクのチュウリップが描かれた一輪挿しを二つ買った。一つは社長に、もう一つは片想いしているという女性に使ってもらえたら嬉しい。

色々なイラストがあったものの、見た目にも可愛く、それに和馬さんが教えてくれたピンクのチュウリップの花言葉がぴったりだと思い、これに決めた。

ちなみに、花言葉は『誠実な愛』とのこと。社員思いの社長は、きっと、好きな人にも誠実な態度で接するはずだから。

お店を出て、私は隣を歩く和馬さんを見上げた。

「新しい花瓶も社長へのプレゼントも買ったので大満足です。社長、気に入ってくれるといいなあ」

ニコツと笑いかけると、彼もニコツコリ笑う。

「ユウカがわざわざ選んでくださったものを気に入らないとなったら、いよいよ蹴り飛ばすしかありませんね」

——その笑顔、なんだか怖いんですけど。

社長が悪寒を感じて震えているとは、先ほど同様に思いもしない私だった。

なんだか和馬さんの周りの空気が冷たくなったので、私は別の話題を口にする。

「え、えつと……、それにしても、パツと花言葉が出てくるなんて、さすがは和馬さんです。誠実な愛、いい言葉ですよえ」

「社長は部下にも優しい人なので、きつと片想いが実った時は、彼女さんにもとびきり優しくしてあげるんでしょうね。和馬さんも、そう思いませんか？」

ところが、この話題転換はあまり功を奏さなかった。

「ピンクのチュウリップには、もう一つ、代表的な花言葉があります」

「へえ、なんですか？」

彼の言葉に興味津々といった視線を向けると、形のいい和馬さんの目が緩く弧を描いた。

『愛の芽生え』というものです」

「わあ、それも素敵な花言葉ですね。社長とお相手の間に、早く愛が芽生えたらいいなあ」

しかし、はしゃぐ私の横からは、ふたたび冷たい空気が漂ってきた。

「さあ、どうでしょうか。肝心なところでヘタレを発揮する社長の愛の芽は、一生、土から出てこない気もしますが……。愛するユウカが私以外の男性を気遣うなど、まったくもって腹立たしいですから、それでもいいでしょう。むしろ、そうあるべきです」

「いや、あの、そんなことを言ったら、社長がかわいそうです。社長にも幸せになってほしいですし……」

引きつった笑みを浮かべる私に、和馬さんはさらに目を細める。

「いざとなったら、私が蹴飛ばしてでも行動を起こさせますよ。どうぞ、ご安心ください」

ことさらいい笑顔で言い切られても、安心できるはずがない。

セレクトショップでの買い物後は、よく行くショッピングモールに向かった。

そこでお昼を済ませてから、あるものを買うため本屋に向かう。

和馬さんには内緒にしていたけれど、結婚情報誌を買いたかったのだ。

今はネットで簡単に知りたい情報を調べられるけれど、『結婚情報誌を買う』ということにずっと憧れていたから。

いつか彼氏ができて、その人と結婚することになったら……という夢を、思春期を過ぎた辺りから抱き続けてきた。

それがついに叶い、念願の雑誌を堂々と手に入れることができる。

——はあ、今日まで長かったなあ。

学生時代に友達と、『結婚するなら、こういう人がいいな』、『新居は、こんな感じで』などと話し合っていた頃が懐かしい。

ニヤケそうになる顔を必死に引き締めながら、私は足を進める。

昼時ということもあり、本屋は比較的空いていた。

いつもの私なら、料理本コーナーやファッション雑誌のコーナーに向かう。

普段とは違う場所へと向かう私に、隣を歩く和馬さんが声をかけてくる。

「ユウカ、今日はどのような本を買うのですか？」

問いかけられたのは、ちょうど目的の場所に着いた時だった。

私は繋いでいた手を解き、テレビでよく宣伝されている雑誌を取り上げた。かなり大判で分厚い雑誌を、彼に向かってオズオズと差し出す。

「……これです」

表紙には結婚に関する文字がたくさん書かれていて、中央には真っ白なウェディングドレスを着た女性が写っている。

男性の和馬さんはこの雑誌を知らないかもしれないが、表紙を見たら、これがどういったものなのかピンとくるはず。

これまでの私は和馬さんの後をくつついていく感じだったけれど、彼のことを一生支えていこうと決意してプロポーズした日から、ちよつとずつ進歩している。こんな風に、結婚について積極的に考えられるようになったのだ。

「知らないことだらけなので、今のうちに勉強しようと思ひまして。たぶん、準備することがたくさんあるでしょうし」

エへへと照れ笑いを浮かべた瞬間、ものすごい力で抱き締められた。

「うわあっ」

私は咄嗟に雑誌を胸に抱き込み、皺にならないようにガードする。

そんな私に構うことなく、和馬さんがギューギューと腕の力を強めた。

「ああ、ユウカ。最近のあなたは行動力に溢れていて、惚れ直してしまいます」

たかが結婚情報誌を買いに来ただけなのに、和馬さんはやたらと感動してくれている。過去の私は結婚に対してかなり尻込みしていたので、感動する彼の気持ちも分からなくはない。

喜んでくれたことはありがたいものの、ここは大型ショッピングセンター内の本屋。混雑していないとはいえ、人の目はあるのだ。

おまけに結婚情報誌コーナーは店内でも目立つ位置にあり、通路を歩きかう人たちにも丸見えだった。
遠巻きに私たちを見ている女性のお客さんたちが、「きゃー!」、「なに、ドラマの撮影!」などと、にわかになわつき始める。

「か、か、和馬さん、放してください!」

ジタバタ暴れると、彼もここがどこなのか思い出したようで、すぐに腕を解いてくれた。

「すみません、つい」

「いえ、その、怒っている訳じゃなくて、恥ずかしいだけです。じゃ、じゃあ、これ、買ってきますから!」

頭の天辺から湯気を出しているような気分、私はその場から駆け足で逃げ出した。

夕飯用の食材を買い物してから、和馬さんの部屋に戻ってきた。

時間は十六時を過ぎたところなので、ご飯を作り始めるにはまだ早い。
ということで、リビングで雑誌を読みながらノンビリすることにした。

ソファに腰を下ろした私は、今日買ってきた雑誌を膝の上に載せ、手の平で撫でる。

——この私が、こういう雑誌を買う日が来るなんて、一年前は想像もしていなかったなあ。

そんなことを心の中で呟きながら、隣に座る和馬さんを見上げた。

「どうしました?」

優しい微笑みを浮かべた彼が、右腕で私を優しく抱き寄せる。

「まともにお付き合いをしたことがなかった私が、まさかこの雑誌を買うなんてビックリだなと思っていたんです」

結婚どころか、恋愛すらも縁遠いと思っていた。その私に、将来を誓い合う素敵な彼氏ができたのだ。本当に、人生とは分からない。

「そろそろ、具体的に動いたほうがいいですよね」

私が言うと、和馬さんが大きく頷く。

「式場の予約など、結婚式までにやらなくてはいけないことも、色々あるみたいですよ」
彼も雑誌の表紙に視線を落とす。そこには、「準備」や「マナー」に関する見出しが躍っている。

「そうですね、式場が決まったら、料理や引き出物も決めなくちゃ。あと、ドレスの試着もありますよね。もちろん、和馬さんのタキシードも」

衣装については、私よりも彼のほうが大変そうだ。

小柄ではあるものの、私の身長はそこまで平均から外れていない。どうしても丈が合わない場合

は、ハイヒールで誤魔化すという手もある。

しかし日本人にしてはかなり長身の和馬さん。合うサイズが、ちゃんと見つかるだろうか。裾や袖が短いからといって、生地を付け足す訳にはいかないのだ。

そんなことを考えていたら、和馬さんがグイッと私を引き寄せた。

「式場を選ぶこともそうですが、その前に大事なことがあります」

「なんですか？」

見上げると、これまで穏やかだった彼の表情が心なしか引き締まったものになる。

「ユウカのご両親に、改めてご挨拶しませんと」

彼が言いたいことが理解できなくて、私はきょとんとしてしまふ。

「挨拶はすでに済ませたのに、改めてするんですか？」

そんな私に、和馬さんは真剣な表情のまま口を開いた。

「以前伺ったのは、結婚を前提にした付き合いをしているという報告が目的でした。ですから次は、『ユウカさんをください』と挨拶をしなくては」

「えっ？ あつ、そ、そうですねっ」

お互いの親と顔を合わせたことですっかり安心していただけけれど、結婚にあたってそれでおしまいという訳にはいかない。

普段の両親の様子からは、和馬さんとの交際を反対しているようには見えない。それどころか、美形な上に礼儀正しい和馬さんを母は大層気に入っているから、諸手を上げて熱烈大歓迎だろう。

父も終始呆気にとられた感じだったけれど、あれはたぶん、私にこんなにも素敵な彼氏ができたことに驚いていただけだと思う。はつきり反対されたこともないので、こちらも大丈夫のはず。

とはいえ、結婚とは家同士の付き合いの始まりでもあるから、まずは親に許可をもらうべきなのである。

「あなたのご両親にお会いした時には私たちの結婚に反対はしないように感じましたが、やはりはじめは必要でしょう。まして、あなたは一人娘です。ご両親にとって、大事な挨拶になるはずですよ」

「はい」

コクリと頷き返す私に、和馬さんは少しだけ表情を緩めた。

「それでは、ご両親の都合を訊いておいてもらえますか？」

「分かりました。えっと、それじゃあ、私も和馬さんの家へ挨拶に伺ったほうがいいですよね？」

定番の挨拶は、さつき和馬さんが口にしたような『お嬢さんを、僕にください』といった感じで、彼女側の親に許可をもらう意味合いが強いだろう。

だけど、結婚とは二人でするものだから、彼氏側へも挨拶が必要な気がする。こういう場合、彼女の実家が先だろうか。彼氏の実家が先だろうか。

あまり聞かない話なので、実際にはどうなのか見当もつかない。

そう聞いかけたら、和馬さんが苦笑を零す。

「まずはユウカのご両親に挨拶を済ませて、結婚の許可をいただいてからにしましょう。私の家族

はあなたとの結婚に反対しませんから、報告をするだけでかまいません」

そういえば、初めて和馬さんのお家を訪問した時には、すでにお母さんからお嫁さん認定されていたつけ。

和馬さんの入院中にも、お母さんからは『そばで支えてほしい』と頼まれたし、彼が言うように問題はなにかもしれない。

たとえ反対されたとしても、認めてもらえるように頑張るつもりだけどもね。

恋愛ときちんと向き合うことから逃げてばかりいた私は、もうどこにもいない。和馬さんの隣を笑顔で歩いていけるように、前を向いて進むのだ。心の中で、密かに拳を握る。

「夕食を作る前に、親へ電話しますね。和馬さん、近々休日出勤の予定はありますか？」

「いえ、ありませんよ。急に出勤することになったとしても、土曜か日曜のどちらかは都合がつくはずですよ」

そう言ってから、和馬さんの表情が大きく綻んだ。

「こうして、少しずつ結婚に向けて進んでいくんですね。この私に結婚の許可をいただく挨拶に出向く日が来るとは、夢にも思いませんでした」

彼が静かな口調で告げた様子が、妙におかしかった。

思わず笑ってしまうと、彼が不思議そうに首を傾げてみせる。

「なにを笑っているのですか？」

肩を震わせて笑う私は、その理由を素直に話す。

「和馬さんなら結婚相手に困らないのに、そんなしみじみ言うから。それが、なんだかおかしいなって」

私と知り合う前のモチつぷりは留美先輩から聞かされていたし、付き合ってから相変わらずモチモチだ。そんな彼なら、結婚相手はよりどりみどりだったはず。

すると、和馬さんが切れ長の目を柔らかに細めた。

「結婚どころか恋愛にさえも興味をなくしていましたので、いくら言い寄られたところで無意味だったのですよ。それは、ユウカも知っているでしょう？ あの時、本当に申し訳ありませんでした」

確かに、そういう彼の姿は、記憶喪失で入院した初日に思いがけず知ることになった。

あんな風に、女性を切つて捨てる和馬さんなのだ。『恋人がきたらこういうことをして』、『結婚したらあんなことをして』と夢は見ないというのも納得できる。

それを思い出し、私はさらにクスクス笑う。

「いいえ、今となつては笑い話ですし、私と出逢ったことで和馬さんが変わったのも分かったので、気にしていません」

左にいる和馬さんに、ガバツと抱き付いた。

突然のことに驚いた様子もなく、逞しい和馬さんは難なく私を受け止める。

それどころか素早く私を膝の上に抱き上げ、よりいっそう密着してきた。

「あなたと出逢う前の私が見たら、さぞかし驚くでしょうね」

「それ、私も同じですよ」

顔を近づけ、微笑みを交わし合う。

「お互い、予想もしないことになるなんて……。数え切れないほどの偶然が重なって、私たちは出逢ったんですね。彼氏ができて、その人と結婚するなんて、本当に夢のようです」

私の言葉に、和馬さんが深く頷く。

「互いの両親や、それ以前の世代の出逢いがあつたからこそだと考えたら、本当に奇跡的なことですよ。どこかでほんの少しでも違っていたら、私たちは顔を合わせることもなかったでしょう」

和馬さんが隣にいない人生は、もう考えられない。恋人になれないどころか、逢うこともなかったとしたら、私の人生はどれほど色のないものだったのだろうか。

「ふふっ、和馬さんに逢えてよかったなあ」

笑いながら、コツリとおでこをぶつける。

「ええ、この巡り合わせに感謝しています」

私たちは出逢えた奇跡に改めて感動しながら、胸がくすぐつたいような甘いひと時を過ごした。

2 嬉し恥ずかし結婚準備

結婚の許しをもらうという話が出た二週間後の土曜日。私の両親に会う時間が取れたので、昼食に合わせて二人で実家へと向かうことにした。

アパートへ迎えに来てくれた和馬さんは、前回同様にスーツ姿だ。だけど、気合いの入りが違うように感じる。

いつもと違い前髪を上げておでこを見せるヘアスタイルは、誠実さと清潔感がよく表れている。ネクタイの結び目も、普段よりかっちりしているような気がした。

もちろん、ピカピカに磨き上げられている靴にも、彼の気合いがしっかりと感じられる。

それだけ、今日の挨拶を大事に考えてくれることが伝わってきた。そういう彼の気持ちが、本当に嬉しい。

玄関先で彼を出迎えた私の顔は自然と緩むが、それと同時に気が引き締まる。

和馬さんのように、私も誠実な態度で、彼と彼の家族に向き合いたい。

そんな決意を新たに、私はアパートを出た。

和馬さんを連れて実家に行くと、笑顔の母が出迎えてくれる。

「いらっしやい。さあ、上がって」

ニコニコと笑っている母だけ、その表情はどこかきこえない。どうやら、緊張しているらしい。電話では『週末に時間を取ってほしい』としか伝えなかったものの、和馬さんがなんのために来たのかは察しているようだ。

普段呑気な母でさえ緊張しているのだから、父はさらに緊張しているだろうと予想していたら、その通りだった。

リビングのソファに座っている父は、新聞を広げてくつろいでいるように見える。休日の父は、いつもこういう感じだった。

しかし、忙しなく何度も足を組み替えているのだ。おまけに、やたらとお茶を口に運んでいる。自分の父親が見せる一面を可愛いと思いつながら、きちんと向き合ってくれることに感謝するばかりだ。

ほら、よく聞くでしょ。「娘はやらんー」とか言つて、早々に彼氏を追い返す父親がいるって。

私は一人娘で、しかも短大卒の社会人二年目。結婚なんて早いと怒鳴られても、おかしなことではない。

いや、これまでに恋愛の『れ』の字もなかった娘だから、反対に『よくぞ、もらってくれた!』と感謝している可能性もあるかも。とりあえず、とげとげしい雰囲気ではないことはありがたい。母に連れられてやってきた私は、父に声をかける。

「お父さん、来たよ」

私に視線を向けた父の表情がふいに柔らかくなったものの、背後に立つ和馬さんの姿を目にして、

ふたたび表情を硬くした。

とはいえ、その変化は和馬さんに対する嫌悪や拒絶ではなく、緊張から来るものと予想できる。私がリビングに足を踏み入れると、和馬さんが頭を下げた。

「お邪魔いたします」

その挨拶に、父は静かに頷いただけ。これも、緊張ゆえのものだ。決して、『お前なんかと、口をきいてたまるか!』ではない。

「さあ、二人とも座って。まずは、お茶にしましょう」

私たちは母の勧めで、ローテーブルを挟み父の向かいのソファに腰を下ろす。

全員の前にお茶を置いた母が父の横に腰かけた時、おもむろに和馬さんはソファから立ち上がった。

——あれ? 車に忘れ物でもした? 仕事の電話がかかってきた訳でもなさそうだし。

車から下りる時、手土産やバッグはちゃんと持ったはず。

それに社長には今日のことを話してあるので、よほど緊急でもない限り、連絡はないだろう。

どうしたのかと思っているうちに和馬さんはその場から少し横にずれ、父と母に自分の全身が見える場所で正座をする。

突然のことに、両親も私も驚いた。

「あ、あの、どうしたんですか?」

声をかけたものの、和馬さんは視線をまっすぐ両親に向けたままである。

皆が目を丸くする中、背筋を伸ばして正座をしている彼が静かに口を開く。

「先日引き続き、お時間を作ってくださいまして、ありがとうございます」
床に手をつき、彼は綺麗にお辞儀をした。和馬さんは剣道の有段者なので、堂に入った姿だ。こんなに美しいお辞儀は、見たことがない。

頭を下げた状態でたつぷり時間を置いてから姿勢を戻した彼は、静かな口調で話を続ける。

「今日は、ユウカさんとの結婚の許可をいただきましたくて、こちらへ伺いました」

和馬さんは一呼吸置いてから、ふたたび口を開いた。

「私にとつて、ユウカさんはなによりもかけがえない、大切な存在です。彼女が隣にいない人生は、私には考えられません。私と一緒にいることで幸せだと思ってもらえるように、精いっぱい努力をいたします。どうか、私との結婚を許していただけませんか」

穏やかな声だけど、真剣な表情とピシリと伸びた背中が、彼の本気を物語っている。

これまでに優しく甘い愛の言葉をたくさん伝えてもらったし、何度も結婚したいと言われてきたけど、私の両親の前でこんなにも堂々と結婚の意思を告げる和馬さんの様子は、それとはまた違う。思わず胸が熱くなって涙が滲んできた。

しかし、ここでワンワン泣いてしまったら、和馬さんの挨拶を台無しにしてしまう。私は必死になつて我慢していた。

少しの間、リビングに沈黙が流れる。

その空気を破つたのは、父だった。

「……ありがとう」

声はわずかに震えていて、心なしか目も潤んでいる。

「ユウカを、私たちの娘をそんなにも大事に想ってくれて、本当にありがとうございます」

その言葉に、母が続く。

「娘はいつか嫁ぐものだと、ユウカが生まれた時から分かっていたんだけど。やっぱり実際にそのセリフを聞くと、思った以上に感動するわねえ」

父は、大きく頷いた。だけど、俯いたまま、一向に顔を上げようとはしない。

そんな父の左腕を、母が肘で軽く突つく。

「もう、お父さんたら、感激しちゃって。今からそんな調子じゃ、結婚式で号泣するんじゃないかしら。ハンカチ、たくさん持って行かなくちゃね」

しみみりした空気を和ませようと、母があえておどけた声を出した。それから、パンと手を打つ。

「さ、食事にしましょうか。ユウカ、手伝って」

「え？ でも……」

私が席を立つと、和馬さんと二人きりにされた父が戸惑ってしまうのではないだろうか。どちらかというと、父は口下手だから。

父と和馬さんの顔を交互に見る私の腕を、母がガシッと掴む。

「大丈夫よ、いらっしやい」

母の笑顔に促され、私はキッチンへと向かった。

「お父さん、大丈夫かなあ」

和馬さんは心配りの達人だから、ぎこちない様子のお父ともうまく会話できるだろう。それでも、ついつい心配になってしまふ。

——しかし、それは私の杞憂^{きゆう}だった。

母の話だと、前回父は驚いてろくに話ができなかったけれど、和馬さんが来てくれたことを喜んでいたらしい。

なんでも、父はずっと息子もほしかったとのこと。だから、いずれ私が結婚して和馬さんが義理の息子になってくれる日を、密かに待っていたようだ。

その証拠に、私がキッチンから戻ってくると、かなり和やかな雰囲気^{まぶら}で二人は会話していた。しかも、いつの間にか「和馬君」と呼んでいる。

結婚を許してもらえたこと、和馬さんの存在を父が受け入れてくれたこと。

そのことが、改めて私の胸を熱くした。

無事に結婚の許可をもらった私たちは、その足で和馬さんの実家に向かった。

この前と同じようにリビングには美形家族が勢揃い^{まじり}していて、その光景にはやはり圧倒される。顔もスタイルも平凡な私は、彼らの間に入ると完全に埋没^{まぼ}してしまう。仕方がないと分かっている

でも、ちよつと居心地が悪い。

それでも、皆が私を優しく受け入れてくれたのは以前と同様でありがたい。

「今日のワンピースも、よく似合ってるな」

「本当ね、ユウカちゃんの可愛らしさが引き立っているわ」

「ねえ、後で俺とデートしてくれない？ 可愛いユウカちゃんを、周りに見せびらかしたい」

「お願い、ユウカちゃんの写真を撮らせて！」

和馬さんのお兄さん、お姉さん、弟さん、妹さんが、一斉に私を取り囲んだ。まるで、人懐っこい大型犬たちにじゃれつかれているような気分になる。

嬉しいけれどビックリの歓迎に硬直^{こうちく}していたら、和馬さんがさかさ私を彼らの輪の中から救出してくれた。そして、ギュッと腕の中に抱き込む。

「ユウカが可愛いのは、いつものことです。彼女は、なにを着ても似合いますからね」

得意気に言い放った和馬さんは、左腕を伸ばして弟さんの頭を小突いた。

「ユウカは私の恋人ですので、私以外の男性とはデートさせません」

「……ちえ、ケチ」

ボソリと呟^{つぶや}く弟さんの頭を、和馬さんがまた小突く。

「ケチで結構です」

そんなやり取りをしている中、苦笑しているお母さんが割って入ってきた。

「もう、あなたたちはユウカさんに構い過ぎよ。少しは大人しくしないと、この家に来てくれなくなるわ」

この言葉を合図に、私たちはようやくソファに腰を下ろした。

それぞれが座ったところで、彼のお父さんが口を開く。

「あちらのご両親に、失礼はなかつただろうな？」

やや強張った声で尋ねてくるお父さんに、お母さんも心配そうな視線を和馬さんに向けた。

「和馬のことだから大丈夫だと思っただけ、ユウカさんは一人娘だもの。結婚するとなったら、ご両親も色々考えるでしょうし。特に、ユウカさんのお父様は」

そんな二人に、和馬さんが微笑みかけた。

「きちんと許可をいただけましたよ」

それを聞いて、リビングに漂っていた緊張が一気に解ける。

「そうか」

一言呟いたお父さんが私に向き直り、ピシッと背筋を伸ばしたのちに頭を下げてきた。

「コイツは融通が利かなくて、厄介なところも多いだろう。苦労を掛けるだろうが、ユウカさん、和馬をよろしく頼む」

すると、お母さんも頭を下げてくる。

「記憶喪失になった和馬を見て、この子にはユウカさんが必要だつてつくづく分かったわ。この先もあれこれ面倒を起こすでしょうけど、どうか見捨てないでやってね」

二人に深々と頭を下げられ、私は盛大に慌てた。

咄嗟にソファから滑り降り、さっきの和馬さんのように正座して頭を下げる。

剣道もなにも経験がないので、その所作は正直、不格好なものだろう。それでも構わず、床にお

でこを擦り付ける。

「い、いえ、そんな！ 私のほうこそ、不束者ですが、よろしくお願ひします！ 和馬さんを幸せにしますから、息子さんを私にください！」

勢い余っておかしなことまで口にしなから平伏していると、お腹の脇から和馬さんが腕を突っ込み、ヒョイツと私の上半身を起こした。

「ユウカが頭を下げる必要は、いっさいありません。不束者だなんて、とんでもない。あなたほど素晴らしい女性は、世界中どこを探してもいませんよ」

そう言ってさらにグイツと私の体を引き寄せた和馬さんは、ポスンとソファに腰を下ろした。……私を膝の上に乗せて。

——ひゃああ、やめて、やめて！

恥ずかしさでジタバタともがいていたら、お兄さんとお姉さんがニヤニヤと楽しそうな笑みを浮かべてくる。

「鉄仮面と言われていた和馬が、こんなに可愛い彼女を捕まえやがってよ。しかも、結婚を考える日が来るなんてなあ」

「散々周りから、表情筋が死んでいると言われていた和馬なのにねえ。見てよ、あのだらしなく緩んだ顔。信じられないわあ」

その二人に、弟さんと妹さんも大きく頷く。

「うはあ。和馬兄ちゃんって、溺愛体質だったんだ。人前で彼女を膝抱っこなんて、俺だったらで

きねえよ」

「いいなあ、私もユウカちゃんを抱っこしたい！」

——どうして、誰も和馬さんを咎めないの!? おまけに、妹さんが私を抱っこしたいって、どういうこと!?

「か、和馬さん、下ろして！」

羞恥心が限界を超えて泣きそうになると、お父さんとお母さんがやっと和馬さんを宥める。

「仲がいいのは結構だが、やりすぎるとユウカさんに嫌われてしまうぞ。結婚を反故にされてもいいのか?」

「そうよ。和馬つて、本当に極端な子ね。これまで彼女を連れてきたことさえなかったのに、ユウカさんにはそんなことをして……。いい歳なんだから、時と場所を考えなさい」

親に言われ、ようやく和馬さんが私をソファに下ろしてくれた。ふう、やれやれだ。私はソツと息を吐き、胸を撫で下ろす。

その手を膝の上に置いたら、和馬さんが握り締めてきた。

膝の上に抱き上げられるよりはいいものの、十分恥ずかしい。

手を引き抜こうと力を入れたら、キュツと握られる。

だけどそれは一瞬のことで、皆に気付かれる前に解放された。一応、お母さんの言いつけを守るつもりはあるようだ。

チラリと隣を窺うと、和馬さんが小声でささやいてくる。

「すみません。ユウカから幸せにしますと言っていただけなのに、ものすごく感激してしまい」
嬉しそうな顔でそんなことを言われたら、強くは言い返せない私だった。

私の両親が結婚を許してくれたという報告をしてお暇するつもりだったのに、話が盛り上がって長居してしまった。その上、夕食までごちそうになることに。

申し訳ないと委縮する私に、お母さんは「もともとそのつもりで、準備はしてあるのよ」と優しく言ってくれる。このお母さんとなら、上手くやっていけそうだ。

美味しくて心が温まるお料理を堪能しながら、皆とおしゃべりを楽しむ。その空間には、ちゃんと私の居場所があった。

「ユウカちゃん、唐揚げ食べる? 俺、取ってやるよ」

「ありがとうございます」

お兄さんが大皿に盛りだされた唐揚げを、取り皿によそって差し出してくれる。

「ユウカちゃん、パプリカは食べられるかしら? 私、パプリカのピクルスが得意で、よく作るのよ」

「はい、平気です」

お姉さん特製のピクルスに、舌鼓を打った。

「ねえ、ユウカちゃん。和馬兄ちゃんの弱点、後でコツソリ教えて」
弟さんがスツと近寄ってきて、私の耳元にささやきかける。

その弟さんの頭に、私を通り越して腕を伸ばした和馬さんが拳骨を落とす。

「馬鹿なことを言わないように。それと、ユウカには近付かないでください」
涙目の弟さんを押しつけ、妹さんがグツと身を乗り出してきた。

「私は女だから、ユウカちゃんを抱っこしてもいいでしょ？」

「いいえ、許しません。私以外の人は、ユウカに触れさせませんよ」

五人ブラス私のやり取りを、お父さんとお母さんが微笑ましい目で見守っている。

少し前までは顔も合わせたことがなかった人たちなのに、和馬さんとの結婚を決めたことで、その人たちとも繋がりを持つ。

私と和馬さんだけの関係ではなく、お互いの家族、それから親戚へと繋がりが広がっていく。結婚とは、そういうことなのだろう。

幸いにも私はそれほど人見知りをしないので、和馬さんの親戚と会うのが楽しみだ。竹若家の美形DNAを、是非ともこの目で確かめてみたい。

そのうちにお互いの家族が揃って食事会をしようと約束をして、私たちは和馬さんの実家を後にした。

彼のマンションに戻って玄関に入った拍子に大きく息を吐くと、和馬さんもホッと息を吐いた。

同じタイミングで同じことをしたのが妙におかしくて、二人でクスクスと笑い合う。

玄関を上がり、スリッパを履いた私たちは横並びで廊下を歩く。

「やはり、あの挨拶をする瞬間は緊張しましたね。人前に出ることは慣れていますが、それとはまったく違う空気でしたから」

和馬さんがネクタイに指先をかけて結び目を解くと、いつも通りの穏やかな雰囲気に戻ってきた。その表情の変化から、私が思う以上に、今日一日、彼が緊張していたのだと分かる。

それでも、周りからはそうと気付けないくらいに、和馬さんは堂々と振る舞っていた。

「仕事よりも？」

尋ねる私に、和馬さんがフツと声もなく笑う。

「ええ。ユウカのご両親を前にすると、どの上司や取引先とも違う緊張感がありました。今日の挨拶は、決して失敗が許されませんからね」

彼が相当真剣な気持ちで出向いてくれたのだと、その言葉ぶりから改めて感じる。和馬さんの口から『緊張』なんて、聞いたことがなかったかもしれない。

そうなると、勢いのままに『和馬さんを幸せにします！』と叫んだ自分が情けない。

まあ、勢いがあったからこそ、私の本心だと分かってくれたかもしれない。……と、開き直ろう。もう一度ホッと息を吐いた和馬さんが、心配そうに私に視線を向けてきた。

「ところで、私の態度に問題はなかったでしょうか？」

そんな彼に私は笑顔を返し、次いで体当たりするように抱き付く。

「キリッとした和馬さん、すごくかっこよかったですよ。剣道をしているせいか、正座が様になっ
ているというか。和馬さんの周りだけ、空気がピンと張り詰めた感じになっていくくらいです」

スーツ姿もよかったけれど、機会があったら剣道着姿での正座を見せてほしい。そして、その姿を写真に撮らせてほしい。

鼻息を荒くした私のお願いに、和馬さんは少し困ったように笑いつつも了承してくれた。

「では、写真一枚につき、ユウカからキスを一ついただくという条件で」

「えっ!？」

わずかに迷ったものの、私は頷き返す。和風美青年の剣道着姿は、なにを犠牲にしても写真に撮りたい。いや、和馬さんとのキスは、犠牲でもなんでもないけどね。ただ、恥ずかしいだけ。

話がまとまったところで腕を解き、私たちはリビングへと向かう。

レースでできた半袖のカーディガンを脱ぎ、それをソファの背に掛けた。その隣に、和馬さんが外したネクタイを並べる。

「今、飲み物を用意しますね」

キッチンへ行こうとする私を、彼がうしろから抱き締めてくる。

「あなたのご両親に結婚を許していただけで、本当によかったです」

実感がこもる口調に、胸の奥がくすぐったくなる。

私は背中を彼の胸に預け、体の前に回されている腕に触れた。

「和馬さんなら、絶対に反対されませんよ。逆に、私のほうがよく許してもらえたなって、思っているくらいですって」

頼り甲斐のある胸に寄りかかりながら、私は気になっていたことを問いかける。

「それにしたって、床に正座までしなくても、よかったんじゃないですか?」

私の場合は彼の両親に頭を下げられたことでパニックになり、つい土下座をしてしまった。

ところが、和馬さんはまるで決めていたかのように、スッと床に正座したのだ。

私の問いかけに、彼は少しだけ腕の力を強めてきた。

「いえ、そういう訳にはいきません。小向日葵家の大事な大事な一人娘をもらい受けるのですから、相応の態度を示さなくては」

そして、和馬さんが私のつむじにキスを落とす。

「もちろんあの場だけの態度ではなく、ユウカのご両親に宣言したように、あなたに幸せだと思っただけの努力を、これからも重ねていきますから」

穏やかな温もりを感じながら、私はさらに彼へと体重をかけた。そして首を捻り、和馬さんを見上げる。

「私も、頑張りますね。と言っても、できる範囲でつてことですけど」

へへッと笑う私に、和馬さんがウルリと目を細めた。

「ええ、それで十分です。頑張るすぎるのは逆効果だと、話したことがあるでしょう? 無理のない範囲で、お互いに努力しましょうね」

「はい、分かりました」

大きく頷いたところで、和馬さんが腕を解いた。

気が抜けたせいか、やたらと喉の渴きを感じる。

「じゃあ、飲み物を用意しますから」

キッチンへ向かう私に、「では、私はバスタブにお湯を張ってきます」と和馬さんが言う。その背中に「お願いします」と声をかけ、キッチンへと入っていった。

いつものように和馬さん用のブラックコーヒーと自分用のアイスカフェオレを淹れ、カップをリビングのローテーブルへと運んだ。

程なくして和馬さんが戻ってきたので、ソファに並んで腰を下ろす。

今日のことを振り返ってあれやこれやと話しながら、私は彼の様子を窺っていた。

——なんか、すごく機嫌がよさそう。

帰宅直後はちよつと疲れた表情をしていたのに、あれから時間が経った今は何倍も元気である。

私の視線に気付いた和馬さんが、形のいい眉を片方だけヒョイと上げた。

「ユウカ、どうしました？」

「大したことじゃないんですけど、和馬さんの機嫌が良くなって思っ」

もちろん、彼の機嫌が良いに越したことはない。好きな人の不機嫌な顔なんて、見たくないから

ところが彼の機嫌が良い場合、大体において私の精神力がガリガリと削られる事態になるから注意が必要なのだ。主に羞恥の意味で。

私の言葉に、彼はクスツと笑う。

「それは当然ですよ。なにしろ、ユウカからとても嬉しい言葉をいただきましたからね。その喜び

を、じつくりと噛み締めていたところです」

途端に、私の顔がカアツと熱くなる。

彼氏の親に、『幸せにしますから、息子さんをください！』と言い放つ女性は、はたして私以外にいるのだろうか。

なにか言わなくてはと焦った結果、飛び出したのがあのセリフだったのだが、他に言いようがあったのではないだろうか。

まったく、私はいつまで経っても落ち着いた大人の女性になれやしない。

「そ、そうでしたか……」

相変わらずな自分の態度を反省しつつ、私は手の中のカップに視線を落とした。すると和馬さんはテーブルにカップを置き、空いた手で私の髪を優しく撫でる。

「いつもは、私ばかりがユウカをほしがっていますからね。いえ、私はユウカの愛情を見返りとして望んでいるのではなく、自分の心のままにあなたを欲し、あなたを愛しています。ですが、ユウカの口からあのようなセリフを聞くと、喜びもひとしおなのですよ」

クスツと小さく笑った彼は、私のこめかみに唇を押し当てた。

「ユウカを好きになるほど、あなたの温もりと一緒に過ごす時間が、そしてあなたの仕草や言葉が、大切な宝物になるのです」

顔を見なくても嬉しそうにしているのが分かる口調を耳にして、全身が熱くなる。

「……そう言ってもらえると、救われます。自分では、失敗しちゃったなと思っていたので」

モジモジと手の中のカップを弄りながら呟くと、今度は音を立ててこめかみにキスをされた。

「失敗だなんて、とんでもない。私の家族は、そのセリフを聞いて安心したはずですよ」

「え？」

思わず顔を上げたら、目を細めている彼と視線が合う。

「あなたに心から望まれて結婚するのだと、よく分かったでしょうから」

そうささやいた和馬さんが、ほんの少しだけ表情を曇らせた。

「私がなぜ恋愛や結婚に興味をなくしたのか、家族の皆知っています。恋人の振りをして、家に押しつけてきた女性も少なくはなかったですしね。それと、いつの間にか姉と意気投合した中村君が、心配して大学の様子を話していたようなので」

彼の過去の恋愛があまり幸せなものではなかったと、留美先輩から何度も聞かされていた。

さらには、元カノの津島さんと対峙した時、彼女が和馬さんをアクセサリー扱いしていたことも耳にした。

他人の私でも顔を顰めてしまう話だから、当の本人である和馬さんが深く傷ついたことは、想像に難くない。

私は口を挟むことなく、彼の話にただ耳を傾ける。

「時折母が、『そろそろ、恋人を作らないのか?』、『知り合いの娘さんと、お見合いしてみないか?』と言うことはありました。しかし私はそういったことに一切の興味がなく、ずっと断り続けていたので、いつまで経っても変わらない私を見て、寂しそうに笑っていた母を何度も目にしまし

たね」

細く息を吐いた和馬さんは、マグカップを握る私の手の上に自分の手を重ねてきた。

「ユウカに出逢うまでの数年間はそのような私でしたから、結婚の報告をしたことが、とても嬉しかったのだと思います」

確かに、和馬さんの家族は、終始はしゃいでいた。

私たちの結婚を喜んでくれたことは嬉しかったけれど、そこまで喜ぶことだろうか、ちょっとだけ疑問でもあった。

それも、和馬さんの寂しい恋愛や結婚を拒絶する態度を家族が知っていたのであれば、納得できるというものだ。

ふいに、和馬さんの手に力がこもる。

「誰がなにを言っても恋人を作ろうとしなかった私を変えたのですから、ユウカは竹若家にとって女神様ですね」

「えっ? め、女神だなんて、そんなっ!?!」

気恥ずかしさのメーターを振り切るようなことを言われ、身を縮こまらせる。

その時、お風呂場から『準備が終わりました』というアナウンスが聞こえてきた。

「ユウカ。カフェオレを飲み終えたら、お風呂に入ってらっしゃい。今日は、慣れないことで疲れたいでしょうから」

そう声をかけてもらったので、それ以上、面映い思いをせずに済んだ。

とりあえず、冷たいカフェオレをゴクゴクと飲む。

しかし、すっかり飲み干しても、全身の火照りは治まらない。このままお風呂に入ったら、あつという間にのぼせてしまいそうだ。

それと、私は『あること』を実行したので、できることなら和馬さんが先に入ってほしい。空になったカップを手の中でモジモジと弄り始めると、彼がそのカップをスツと取り上げる。

「どうしました？」

なかなか腰を上げない私を、和馬さんが不思議そうに眺めていた。

「あ、あ、あのつ、和馬さん、先にお風呂、どうぞ！ 私は、その後で入ります！」

俯いて手を握ったり開いたりしていたら、「ですが、いつもはユウカが先ではありませんか」と、和馬さんが言った。

ここに泊まる時は大抵、私が先にお風呂を使わせてもらっている。でも、今夜ばかりは事情があった。

「い、い、いえ、いいんです！ 和馬さんから、先をお願いします！」

私が計画していることは最終的に和馬さんの目に触れるものだけど、後に回したほうがインパクトがありそうだから。

どうぞ、どうぞと和馬さんをグイグイ押したら、彼はゆっくりと立ち上がる。

「では、先に入ってきますね」

そうして一旦は脱衣所に向かった和馬さんだが、急に足を止めてこちらを振り返った。

「ユウカ、私と一緒に入りませんか？」

「へっ？」

予想だにしない提案をされ、思わずソファから滑り落ちそうになる。いや、ずり落ちた。

右半身だけが落ちこちているという不格好な姿で、視線の先にいる彼を見上げる。

「い、い、い、一緒っ!？」

「それなら、どちらが先とか後とか、関係ありませんよね」

切れ長の目を細めてにつこりと笑う和馬さんに、私は首が取れる勢いで横に振る。

「そ、それは無理です！ ま、まだ、そこまでのレベルには達していません！」

意識がはつきりしている状態で和馬さんとお風呂に入るなんて、考えただけでも頭の天辺から灼熱のマグマが噴き出しそうだ。

今の私は恋愛初心者からレベルアップしたはずだけど、RPGで言ったら、布の服から旅人の服に変わったレベルでしかない。始まりの村の周辺で、どうにか雑魚モンスターを一人で倒せるようになった程度なのだ。

ベッドの上で彼の裸を見たこともあるし、自分の裸を見られたこともあるものの、それとこれとは訳が違う。だって、だって、和馬さんは、絶対にお風呂場の電気を消させてくれないもん！

ブルブルと高速で首を横に振っている私の頭に、歩み寄ってきた和馬さんの右手がボンと乗る。動きを止めてチラッと見上げると、クスクス笑っている彼と目が合った。

「分かりましたよ、一人で入ることにします。……今夜は」

「ええっ!？」

ふたたび私が驚いている間に、和馬さんはスタスタ歩いてリビングを出て行ってしまふ。そのうしろ姿を見ながら、私はパクパクと忙しく口を開閉する。

「今夜は!? 今夜はって!？」

ここで風呂を借りる時は、気を付けなくてはならないと思った私だった。

和馬さんが脱衣所の扉を閉めた音を聞いた私は、大きく息を吸い込んでから立ち上がった。ぼやぼやしている時間はない。

寝室のクローゼットを開け、置かれている私物の中から紙袋を手取る。

「いつか着るつもりで買ったけど、やっぱり今夜だよね」

袋の中に入っているのはネグリジエだ。

自宅でも和馬さんの部屋でも、寝る時はいつもパジャマを着ているのだが、通販カタログに載っていたこのネグリジエに一目惚れして、つい買ってしまったのである。

それはスケスケ素材でできたセクシー系や、フリフリレースが付いたラブリー系ではない。なんの変哲もないネグリジエだったけど、色合いがすごく気に入ったのだ。

全体は明るいレモンイエローで、首回りや袖口には鮮やかなグリーンのラインが刺繍しゅうされている。身ごろの中央にあるボタンも、刺繍しゅうと同じグリーン。パツと見た時、タンポポみたいな配色だと思った。

皆から『タンポポちゃん』と呼ばれている私が着なくて、誰がこのネグリジエを着るというのだ!

そう勢い込んで購入したのだが、思い入れが強すぎてなかなか袖を通せなかった。

逆プロポーズした日に着るのがベストだったかもしれないが、あの日は和馬さんがホテルを予約しているなんて知らなかったのだ、なんの準備もしていなかった。

結婚の許可をもらった今日も、特別な記念日に相応ふさわしいと思う。

「さて、と。怪しまれないうちに、戻りますかね」

エへへと小さく笑った私は、ネグリジエが入った紙袋と替えの下着を持って、寝室を後にした。

リビングのソファに座りバラエティ番組を見ていると、和馬さんがこちらにやってきた。

「ユウカ、お待たせしました。どうぞ、入ってきてください」

声をかけられて振り向いた私は、内心で妙な声を上げる。

——おっふ!

シンプルなTシャツとスウェットのズボン姿だというのに、毎度のことながらお風呂上がりの和馬さんは色気が半端はんぱない。

やや水分の残る髪は艶を増していて、前髪が目にかかっている。

それだけでも色気が増しているというのに、ほんのり上気した頬が、これまた色っぽいのだ。

極めつけは、普段Yシャツの襟で隠れている鎖骨が見えていることだろうか。首筋から鎖骨に繋がるラインが、男性特有の艶を放っている。

スケスケ素材でできたネグリジエを着た私でも、彼の色気には勝てそうにない。

——自分の彼氏が魅力的なのはいいことだけど、なんかちよつと悔しい。

いやいや、私の取り柄は元氣いっぱいなところだ。色気で勝負する必要はない。……ということにしておこう。

「なんだか複雑な表情ですが、その番組がどうかしました？」

和馬さんは私を見つめて首を傾げた。

私は照れながら不貞腐れるという珍妙な表情を引つ込め、誤魔化すようにヘラツと笑う。

「あ、気にしないでください！　じゃ、じゃあ、私、お風呂に行つてきます！」

傍らに置いていた着替えと紙袋を抱えて立ち上がった私は、脱衣所を目がけてダッシュした。

「ああ、もう。なんで、和馬さんって、あんなに色っぽいんだろう」

お風呂場で髪と体を洗い終えた私は、湯船に浸かりながらポツリと呟く。そして、小さなため息を吐いた。

「色気満載の和馬さんに、勝てる日が来るのかなあ。いつかは、私の色気でメロメロにしたいんだけど」

この調子だと、結婚してもあまり変わらないような気がする。

和馬さんは何度も『変わらなくていいですよ』と言つてくれるものの、やはり「人妻」という言葉に相応しい色気を手に入れたいのだ。

「んー、どうしたらいいのかなあ」

私は口元までお湯に浸かり、プクプクと泡を噴き出す。それから両手でお湯を掬い、ザブリと顔に掛けた。

「取りあえず、出よう」

どんなに考え込んだところで、すぐに色気が出るものではない。

それに湯船に浸かりながら考え事をしていたら、そのうちののぼせてしまつて、和馬さんに心配をかけてしまうだろう。

もう一度顔にお湯を掛けてから、私は湯船から上がった。

フカフカのバスタオルで体を拭き、手早く髪を乾かしてからショーツを身に着け、ネグリジエをまとった。鏡に映る私は、鮮やかなタンポポカラーに包まれている。

彩りは私らしいけれど、どんなに眺めても色気が見つからなかった。

ほんのり色付いた頬は、和馬さんと違い、単に血色がいいと思えない。半分だけ乾いた髪も、プル上がりの子供のようだ。

「女性ホルモンが入ったサプリでも飲んだら、少しはマシになるのかなあ」

鏡の中の自分にデコピンをして、私は脱衣所を後にした。

ゆっくり歩いてリビングに近付くと、オルゴールの音が聞こえてくる。

少し前のデートで行ったオルゴール館で買ったCDだろう。有名な洋楽メドレーをオルゴール版にアレンジしたものが、静かに流れていた。

リビングに続く扉を開けると、私がテレビを見ていた時よりも照明が落とされている。さらには、普段はほとんど使ったことがない間接照明が点灯していた。

柔らかなオレンジ色の光を放つ間接照明により、いつものリビングとは違う趣だ。

——これは、どういうこと？

私がお風呂に入っている間、いつもなら和馬さんはテレビでニュースを見たり、経済雑誌を読んだりしている。だからリビングは明るかったし、テレビ以外の音が聞こえてきたことはなかった。

戸惑いながらも、私はこの穏やかな雰囲気にもっと息を吐く。

「和馬さん」

静かに歩み寄ると、ソファに座っている和馬さんが振り向く。

私のかっこうを見てわずかに息を呑み、フワリと優しい気に目を細めた。

「なんと可愛らしい」

そう呟いた彼は立ち上がって私の前にやってくると、じつくりとネグリジェ姿の私を眺める。

「黄色の生地と緑のラインが、まるでタンポポのようですね」

私と同じように、和馬さんの目にもそう見えたことが嬉しい。

「私もタンポポみたいだなって思って、それで買ったんです」

はにかんだように笑ったら、和馬さんも笑みを深めた。

「よく似合っていますよ」

穏やかな声で言った和馬さんが、なぜかその場に片膝をつく。

様子からして立ちくらみを起こした訳ではなさそうだし、もちろん、これまでの態度を見れば、私のネグリジェ姿に落胆して膝をついた訳でもないだろう。

「あの、和馬さん？」

軽く首を傾げると、和馬さんは目を細めたまま私を見上げた。

「こうして見ると、ユウカはタンポポの国のお姫様ですね」

このネグリジェは一般的なデザインで、裾に向かって広がっている。だからといって、ドレスのようにフワフワもヒラヒラもしていない。

それに、お姫様に見えるほど、私は美人ではない。

女神様と呼ばれたことも恥ずかしかつたが、お姫様というのも、それと匹敵するくらいに恥ずかしい。

彼の言葉にモジモジと俯いていたら、和馬さんがスッと左手を差し出してきて。

手を繋ぐというのではなく、手の平を上になっている。

——この場で手相診断ってことじゃないよね？ そもそも、私は手相なんて分からないし。

かといって、手品が始まる雰囲気でもない。

なんだろうかと彼の手を見つめていると、おもむろに和馬さんが口を開く。

「タンポポの花言葉は、『真、心の愛』なんです」